

《研究ノート》

宮崎市定のローマ帝国

—『天を相手にする—評伝宮崎市定』補遺—

井上文則

はじめに

筆者は、今年の7月24日に東洋史学者宮崎市定（1901～1995年）の評伝『天を相手にする』を国書刊行会から刊行したが、初稿の校了は5月23日であり、この初稿校了から刊行までの2ヶ月の間だけで、宮崎に言及する著作が3冊も刊行された。うち1冊は、7月10日刊の岡本隆司氏の『近代日本の中国観—石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』（講談社）であるが、この書籍は講談社のPR誌『本』に連載されたものであり、連載時に既に参照していたので、ここでは触れない。本稿では、残る2冊の著作が宮崎に言及する内容を紹介することで拙著を補訂し、併せてそこから波及する問題として、宮崎のローマ帝国研究について論じたい。

教師としての宮崎

まず6月20日に、森本公誠氏の『東大寺のなりたち』（岩波書店）が出版された。森本氏は、言うまでもなく東大寺長老であるとともに、世界的なイスラーム史の研究者でもある。森本氏はその「結びにかえて」において、京大文学部の学生時代に受けた宮崎の授業の思い出を語っている。

論語の講義を受けた時には、宮崎は「温故知新、可以為師矣」を取り上げ、「この「温故」をなぜ「ふるきをたずねて」と読むかわかりますか、「温」は「あたためる」の意味のはずですが、なぜですかと尋ねられた。答えられる学生は誰もいなかった。先生はいつもかみしめるようにゆっくりと話される。先生の口調をまねて講義する学生もいたほどであった」という。宮崎の提示した疑問の解については、森本氏の著作を読んでいただきたいが、宮崎が教えたかったのは「漢文の史料は、ただ文字面を追うのではなく、よくかみしめ、「行間を読む」さらには「紙背に徹する」ほど読みこなすことを心掛けてください。それでこそ歴史は生きてくるのです」ということであった。また、森本氏は、宮崎の『鹿洲公案』をテキストにした演習を受けた時の思い出にも触れ、その際は宮崎から「たとえ異次元の世界の記録

でも、目のまえに情景が浮かぶように訳さなければ、それは正確に訳しているとは言えないと心得なさい」との教えを受けたと回顧している。いずれの話も、専門の時代を問わず、歴史を学ぶ者が心すべきことであろう。

世界史上のローマ帝国—岡本と梅棹の場合—

その内容は後述するが、宮崎は独自の世界史の体系を持っていた。しかし、宮崎の世界史の体系について、これをまともに評価、あるいは批判した研究はほとんどなかった。拙著ではこのように書いたが¹⁾、その後すぐに宮崎の世界史の体系を自身の世界史の構想に生かした研究が現れた。同じく7月10日刊行、岡本隆司氏の『世界史序説』（筑摩書房）である。岡本氏自身も言うように、『世界史序説』というタイトルそのものが、宮崎が1959年に書いた論文「世界史序説²⁾」から取られている。

岡本氏はまず東洋史学の過去と現状に触れた箇所、宮崎の研究が西洋史の概念や展開をモデルにして行われた、その典型であったと指摘する。宮崎は自身の研究において、都市国家、封建制、ナショナリズム、資本主義の概念を用いており、宮崎の「西洋概念の援用は、西欧近代文明に冷淡だった内藤（湖南）より、はるかに徹底していた」。続けて岡本は、「いま宮崎の著述を読んでも、とても読みやすく、わかりやすい。とても百十年以上も前に生まれた人とは思えない。趣旨がつねに明快なのは、文章のうまさのほかに、こうした概念操作、論理、論法にある。われわれの頭・知識は、すでに過半が西洋の概念で占められているからであり、それだけに宮崎には支持者も多かった半面、批判も少なくなかった。しかし少なくとも現在の東洋史学界では、もはやこんな叙述はできない。西洋的概念に対し、以前よりはるかに懐疑的になったからである」と述べる。その結果、東洋史は、東洋史独自の概念で歴史上の事象を考える方向に向かっていった。例えば、「都市国家」は、「邑制国家」とするのが普通になっているという。しかし、そのようになってしまったために、「西洋史をはじめ、ほかの専攻分野に属する人々は、アジアの歴史の内容が次第に近づきにくく、わからなくなる。ついには西洋の概念に短絡させるのでなければ、東洋史学そのものに関心をうしなってしまった。ここに現状の問題がある」ということになったのである³⁾。岡本氏の指摘は、宮崎の著述の分かりやすさの一端を見事に指摘している。

さて、肝心の岡本氏の世界史の構想は、時代区分と地域区分を再考することから始められるが、このような試みを行った先達として、宮崎を挙げ、宮崎の世界史の体系が「東西のアジアを相対的に独立した地域に分ち、ヨーロッパとも組み合わせて、三者相互の関係と影響のダイナミズムをもちこんだ点が独創的である」と評価する。また宮崎が「日本がアジアとかけ離れて後進的だと説いて」、日本に世界史上の独自の地位を与えていることも指摘する。さらに、このような宮崎の世界史の地域区分が、梅棹忠夫の生態史観と符合するとして⁴⁾、両者の共通点を立脚点に岡本氏は、アジアと、それと異なる日本、西欧から構成され

る世界史を描くのである。

ここでは、岡本氏の世界史についてはこれ以上立ち入らないが、岡本氏がローマ帝国を自身の世界史において、「オリエントの一部」と捉えているのは、興味深い。岡本氏の考えでは、ローマ、そしてこれに先行したギリシアは、オリエントのフェニキア人の影響と抗争の中で生み出されたのであり、それゆえにギリシア・ローマは「オリエントの外延拡大の産物にほかならない。フェニキア・ギリシア、およびその拡大たるローマ・カルタゴが一体になったのが、ローマ帝国であり、いわゆる地中海文明とは、オリエントの一部たるシリアの拡大、つまりオリエントの一部としてとらえるのが正当である⁵⁾」ということになるのである。フェニキア人との関係からローマ帝国を「オリエントの一部」とみなす岡本氏の主張を受け入れることには多分に躊躇を感じるが、岡本氏が宮崎と並んで参照した梅棹も実は、論拠は異なるが、ローマ帝国の位置づけについては、ほぼ同様の、つまりローマ帝国をヨーロッパとは本来別物とする見方をとっていた。

梅棹は、「文明の生態史観」において、「ギリシア・ローマの地中海文明はしばしば西欧文明の前身とみられているが、私は別ものだと思う。あれは第二地域の東部にある古代中国の、西部における対応物であろう。近代イタリアは、第一地域に属するが、それは古代ローマ帝国の後継者ではない⁶⁾」と述べていたのである。梅棹の言う第一地域とは、日本とヨーロッパを指し、梅棹の論文が発表された1957年の段階では、「生活様式が高度の近代文明」となっていた地域であり、それに対して、第二地域とはロシア、中国、インド、トルコなどを指し、「生活様式が高度の近代文明」になっていなかった地域のことである⁷⁾。梅棹は、第一地域のみが近代文明に到達し得たのは、第二地域のように繰返し遊牧民による破壊と征服を受けなかったからであると考えていた⁸⁾。第二地域は、いわば順調な生育を阻まれた土地なのである。梅棹の見方も面白いが、やはり承服しがたい。梅棹の見方に従うならば、旧ローマ帝国領は、遊牧民の攻撃を定期的に受けて、文明の順調な生育を阻まれて来た土地であることになるが、それはやはり歴史的事実に反するだろう。

世界史上のローマ帝国―宮崎の場合―

では、宮崎はローマ帝国を世界史の中で、どのように位置付けていたのか。この点を確認するためには、先に宮崎の世界史の体系を知る必要がある。宮崎が独自の世界史の体系を最初に世に問うたのは、1940年に『史林』に掲載された「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」である⁹⁾。

宮崎は、まず世界をヨーロッパ、西アジア、東アジアに区分する。そして、それぞれの地域が、古代、中世、近世の段階を、時差を伴って経験していったと考える。宮崎の言う古代とは、都市国家が大帝国によって統一されるまでの時期であり、中世はその大統一が崩壊し、封建的分裂の様相を呈する時代。近世は、ルネッサンスと宗教改革を経て、再び統一を目

指した時期に当たる。この統一、分裂、再統一の三段階を最も早く経験したのは西アジア世界であり、続いて東アジア、最後にヨーロッパがこれを追った。しかし、最後を走ったヨーロッパは、より高度な形で近世を迎え、やがては先駆けて産業革命を成し遂げ—この段階以後を宮崎は後に最近世と名付ける—、他の二世界をはるかに追い越すことになったのである。

このような宮崎の世界史の体系の中では、ローマ帝国は、西アジアのアケメネス朝ペルシアと東アジアの秦漢帝国に対応する、ヨーロッパにおける古代の頂点をなす統一国家と位置付けられる。先の岡本の指摘にもあったように、宮崎は当時学問的に最も進んでいた西洋史をモデルにして世界史の体系を組み上げていたので、梅棹と岡本とは異なり、ヨーロッパという地域区分は自明のものとしており、またそのヨーロッパの古代の頂点がローマ帝国であるのも疑問の余地のないことであった。問題があるとすれば、ヨーロッパで作り出された時代の三区分を他の地域に当てはめることにあると宮崎は考えていたのである¹⁰⁾。

宮崎は『東洋的近世』の中では、なぜローマが、ギリシアと異なり、大帝國を築き得たかを問い、その答えをローマ人の組織力に求め、高度な組織力の背後には市民権を被征服民にも与えたことがあったと指摘していた。一方で、ローマがメソポタミア、ゲルマニアを征服できなかったことにローマの外的限界を見、内的にも「属領の人民はたとえ法制的にローマ市民となっても、文化的にローマ化して、完全なローマ国民たる自覚を生ずるには至らなかった。そこに絶えず分裂的な契機が存していた訳である」として、ローマの統一の背後に分裂的な要素が潜んでおり、やがてローマの求心力が衰えると、遠心力が強く働き、中世的な分裂に至ったと考えていた¹¹⁾。

「条支と大秦と西海」

宮崎のローマ帝国研究として逸することができないのは、「条支と大秦と西海」である¹²⁾。この論文は、1939年、すなわち宮崎が満2年のフランス留学を終えて帰国した後、最初に『史林』で発表されたもので、宮崎ご自慢の論文であった。最晩年に書かれた全集の自跋において、「若しも世間の人が、私の書いたものの中に優れたものがあることを認めて下さるならば、私自身の立場としてはこの小論文を、生涯の傑作として持ち出したい¹³⁾」とまで言った論文である。

論文タイトルにある条支と大秦と西海は、『魏略』、『後漢書』といった漢籍に現れる西方の地名であり、この論文は、これらを初めとする漢籍の地名が実際には何処を指していたのか、その比定を行ったものである。宮崎は、比定の核となる条支はシリア、より正確にはこれをセレウキアの音訳とし、大秦はイタリアのローマ市、西海は地中海を指しているとした。当時、通説となっていたのは、H・ヒルトと白鳥庫吉の説であり、両者の説は多少の違いはあるものの、概ね条支はメソポタミア南部、大秦はローマ帝国東方領、西海はペルシア

湾と考えていた¹⁴⁾。宮崎の論文は、当時の通説を真っ向から否定したものであったのである。

宮崎は問題の論文で、まず全体の地名比定の核心となる条支の位置を確定した上で、「大秦の地理風俗」の一節を置き、大秦関係の記事を分析している。この「大秦の地理風俗」がいわば漢籍に現れたローマ帝国の分析となっているのである。そして、「大秦の地理風俗」においては、最初に大秦の地理が分析される。分析の対象となる大秦関係の地理は『魏略』がもっとも詳しく、宮崎も事実上、『魏略』に現れる地名の比定を行っているので、以下、『魏略』の記事を引きながら、宮崎の地名比定について、多少の私見を交えながら、検討していこう。なお、『魏略』の訳については、今鷹真、小南一郎訳の『正史 三国志』（ちくま学芸文庫、1993年）に拠った¹⁵⁾。

大秦の都へ至るルート

大秦関係の地名は大きく、大秦の都に至るルート上の地名と大秦の「支配下」にある「国」の地名に大別される。

『魏略』において、大秦に至るルートは「安息国の領内の安谷城（安息界安谷城）」が起点となっており、ここからの海路と陸路が記述される。安谷城は、宮崎の考えでは、シリアのアンティオキアである。しかし、『魏略』は、安谷城は安息国の領内としており、これに対してアンティオキアはローマ領内であるので、宮崎の説はいきなり歴史的事実とは反してしまうようであるが、宮崎はこの「安息界安谷城」は、『後漢書』によれば「安息西界安国城」となっているので、こちらがより正確でその意味は「大秦国の安息国境に近き安谷城とも解し得られる」として切り抜ける。

『魏略』に戻れば、安谷城から、大秦へは海をまっすぐ西に渡り、順風で2か月、風が弱ければ1年、無ければ3年かかる。これが海路である。ちなみにローマからエジプトのアレクサンドリアへは、順風であれば10日から20日で、逆風であれば2ヶ月以上かかることがあったとされている¹⁶⁾。安谷城がアンティオキアであるとする、時間がかかりすぎるようである。

一方、陸路で安谷城から大秦に至るのには、「安谷城からまっすぐ北に進んで大海の北岸にまでいたり、今度はまっすぐ西に進んで大海の西岸にいたり、こんどはまっすぐ南に進んで烏遲散城を経て、一つの河を渡る。その河は船に乗って一日がかりでやっと渡ることができるのである。そこから海のまわりをめぐり、六日かかって大海を渡ってやっとその都に到達する（從安谷城陸道直北行之海北、復直西行之海西、復直南行經之烏遲散城、渡一河、乘船一日乃過。周廻繞海、凡当渡大海六日乃到其国）」とされる。宮崎は、「大海の北岸」は「希臘、巴爾幹半島、或いは小亜細亜を含むならんと推測される」とし、「大海の西岸」はイタリア半島とする。したがって、これはアンティオキアから北上して、地中海北岸沿いに小ア

ジア、バルカン半島を西に通って、北からイタリア半島へ入るルートを示していることになる。

「こんどはまっすぐ南に」以下の文章については、宮崎は「甚だ難解」とするが、結論的には烏遲散城は、烏丹遲散城の誤りと断定して、烏丹はハドリア、遲散はガリア・キサルピナ州の音訳で、具体的にはボローニャ、あるいはラヴェンナを指していると解し、さらに烏丹と遲散の南にあるとされる河はポー河と推定する。「周廻繞海、凡当渡大海」も宮崎は「意味曖昧なるが、以上の陸道はアドリア海を繞る迂回路なれば、その日数、大海を横断するに相当するの意か、或いは凡の字、否の字の誤にて、「否ざれば当に大海を渡る可し」とでもよむ可きものか」としている。そして「六日乃到其国」は、遲散すなわち、ガリア・キサルピナからローマ市へ至る日数が表されていると考える。以下で見ると、ローマ領内の地名を宮崎は基本的に都市に比定しており、遲散のみ属州名であるのは違和感がある。

大秦の「支配下」の諸国

『魏略』に大秦の「支配下」、あるいは「この国から分かれて封ぜられた小国」、またあるいは大秦が「小王」を置いている国として挙げられているのが、以下の6国である。すなわち、沢散、驢分、且蘭、賢督、氐復、于羅である。

沢散は、「その宮廷は大海の中央に位置（其治在海中央）」し、北方に驢分があり、そこまで半年かかるが、風が強ければ1ヶ月で着く。安谷城にもっとも近く、大秦はその西南にあるが、大秦までの距離は明らかではない、とされている。宮崎は、この沢散をエジプトのアレクサンドリアに比定する。そして大海の中央とは、アレクサンドリアが「ナイル河のデルタ上にあり、海中に突出するを云う」と解釈する。またその北方にある驢分は、次に見るように、プロポンティスカヘレスポントスの音訳とする。アレクサンドリアが安谷（アンティオキア）に近いとされているのは不自然であるが、「アレキサンドリア・シリア間に直通的な航路があるを云いえるか。或いはアレキサンドリア以外埃及の諸都市を列挙しありしを三国志注が削除せし結果か、或いはシリアのアレキサンドレタを混同せしか」と考えを巡らせている。また沢散が大秦の西南にありとされているが、方向が合わないのも、これは西北の誤りと断ずるのである。沢散をアレクサンドリアとするのに宮崎は多分に無理を重ねているように思われる。小川琢治は沢散をキプロス島とし、沢散はその都市タマッソスとするが¹⁷⁾、その方が『魏略』の言う地理に近く感じられる。

驢分は、大秦の都から2千里の距離にあり、驢分から西に向かって大秦に行く道には「海をまたぐ高いかけ橋」があり、橋の長さは230里あるとされる。なお、漢代の一里は、400メートルほどであった¹⁸⁾。宮崎は「海をまたぐ高いかけ橋」とはペルシア戦争の際に、ペルシア王クセルクセス1世がヘレスポントスに架橋した話が伝わったもので、当時既に存在しない橋とみなした。

且蘭は、思陶国からまっすぐ南に進んで河を渡り、渡河地点から西に行ったところにあるとされ、思陶国から且蘭までの距離は3千里、また且蘭をまっすぐ西に進むと汜復国があり、その距離は6百里あるとされている。さらに「且蘭国や汜復国からまっすぐ南に進むと積石があり、積石の南には大海があって、珊瑚や真珠を産出する（且蘭汜復直南、乃有積石、積石南乃有大海、出珊瑚、真珠）」¹⁹⁾。位置関係を整理すれば、思陶の南に且蘭と汜復があり、さらに汜復と且蘭の南に積石、積石の南に珊瑚や真珠の採れる海があったことになる。宮崎は、思陶はシドン、あるいはシッダ、且蘭はエルサレムで、引用文中の現れる汜復は衍字であり、積石はアラビア砂漠、大海は紅海印度洋であろうとする。このうち確定して間違いないであろうと思われるのは、積石とその南の海であろう。積石は、明らかにギリシア語で岩を意味したナバテア王国の都ペトラであり¹⁹⁾、その南の海は紅海である。そして宮崎の言うように汜復を衍字とするならば、積石の真北に且蘭あったことになり、ペトラの真北で交通の要衝となったのは、エルサレムではなく、ボスラではないか。宮崎が且蘭をエルサレムとする根拠は、方向を除けば、音の類似である。宮崎は、且蘭はサレムの音訳と推定するのである。しかし、積石がペトラの意識であるならば、この情報源となった漢人はギリシア人から知識を得ていたことになり、エルサレムはヒエロソリュマと聞いていたのではないだろうか。この観点からも宮崎の比定は成立し難いように思われる。なお、且蘭については、パルミラとする説が多く²⁰⁾、この説を唱える者は、且蘭はパルミラのセム語での呼び名タドモルの音訳とする。

賢督は、汜復の西南600里の距離にある、とされる。この賢督を宮崎はクレタ島に比定している。なお、論文の「後記」には、論文発表後、森鹿三から「賢督をクレタ島に比定する為には、その字が国都のCandyを写したものと見る方がよくはないかと注意を受け」、「或いは然らん」と思ったとあるが、Candyはこの島がアラブの征服を受けた後に現れた地名であるので、賢督=Candy説は成り立たない。Candyは古代にはヘラクリオンと呼ばれていた都市である。

賢督の位置は、汜復のそれにかっているが、汜復は、于羅の東南340里にあり、海を渡っていったところにあるとされている。この于羅は、『後漢書』によれば、斯賓の西南にあるとされており、宮崎は斯賓をユーフラテス川上流のソフェネ地方と比定しているので、その西南はアレppoとするのである。また于羅は、同じく『後漢書』に「安息西界極」にあるともされていることから、同じく安息の西極にあったとされる『魏略』の安谷城と「等価と認められる」ことも、于羅を「アレppo地方」とみなす根拠となる。この場合、アレppoの東南にある島は、キプロスであるので、宮崎は汜復をキプロスに比定するのである。

大秦の風俗

先に述べたように、「大秦の地理風俗」では、大秦の地理に続いて、その風俗が述べられ

る。やはり『魏略』が大秦の風俗についても詳しいので、地理と同様、『魏略』の記事を引きながら、宮崎の大秦の風俗についての解釈を見ていきたい。

「国王はいつまでもその位に留まれるのではなく、国の中で災害や異変がおこると、すぐ別の賢人が王に立てられ、もとの王はそのまま放逐されるが、王もそれを怨んだりはない(其国無常主。国中有災異。輒更立賢人。以為王。而生放其故王。王亦不敢怨)」。

この一文を宮崎は、「羅馬のコンスル、ディクタルの選挙制度を伝え聞きて表すに中国式表現を以てしたるもの」と解釈する。しかし宮崎のこの解釈には疑義が無いわけではない。『魏略』の一文を理解するには、『魏略』がそもそもいつの時代のローマの情報を伝えているかにあるが、宮崎はこの点を問題とせず、直ちに『魏略』の記事をコンスル、ディクタルに結びつけているからである—この問題は先の地理の問題にも当てはまることは言うまでもない—。『魏略』の成立年代は、正確には分からないが紀元後3世紀以後であることは確かであり、とするならば『魏略』の記事は紀元後のローマ帝国の情報、つまり帝政期の情報を伝えている可能性が高いのである。J. Fergusonはこの点を考慮に入れ、『魏略』の情報は甘英によってもたらされたものと考え—甘英は、和帝の永元9(97)年、西域都護班超の命を受けて、大秦へ赴いた—、賢人が王に選ばれるとは、五賢帝時代の「養子皇帝制度」を伝えているとするが²¹⁾、このように考える研究者がいることはもっともなことである。しかし、Fergusonの見解についても、D.D. LeslieとK.H.J. Gardinerは、「養子皇帝制度」の始まりが98年であることから、そもそも年代的に無理があると批判する²²⁾。この批判は、甘英がどれだけの期間、西方に滞在したかにかかってくるが、甘英については出発の年は97年と分かっているが、帰国の年は分かっていない。小谷仲男は、帰国までに「少なくとも二年の歳月を費やしたとおもわれる」と想定しており²³⁾、甘英の西方滞在期間によっては、98年のネルウァからトラヤヌスへの帝権の委譲を伝え聞いたとしてもおかしくはないことになる。なお、LeslieとGardinerは、宮崎同様、魏略の記事はコンスルの制度を反映していると考えている²⁴⁾。

「王が宮殿から外に出る場合、つねに従者に一つの韋の囊を持ってつき従わせ、途中で言上する者があれば、そのいう言葉を書きつけて囊の中に投げこみ、宮殿に帰ってからそれを読んで裁決をする(王出行。常使従人持一韋囊自隨。有白言者。受其辞投囊中。還宮乃省為決理)」。

宮崎は、この一文は、「護民官が四六時中門を開きて、被迫害者が自ら来り投ずるを待ちし等の制度を中国風に潤色せしもの」と解する。この一文についても、先の一文と同じく、いつの時代のローマの状態であるのかによって解釈が変わってくる。宮崎の言う「護民官が四六時中門を開きて、被迫害者が自ら来り投ずるを待ちし等の制度」というのも、その典拠が、筆者自身は分からなかった。欧米の研究は、この一文については何ら注釈を施していない。

「三十六人の将軍がおかれ、事を議する場合には、一人でも将軍が来ていないと、議事が

行われない（置三十六將。每議事。一將不至則不議也）」。

宮崎は、「三十六人は少しく内輪すぎるが、羅馬の議會制度」と解する。宮崎は、おそらく元老院のことを念頭にしているのであろうが、はっきりしない。J.H.Hill は、人数は合わないが、コンスルの制度か、あるいは皇帝顧問會議（consilium principis）のことではないかと指摘している²⁵⁾。

「十里ごとに一つの亭がおかれ、三十里ごとに一つの置（駅伝のうまつぎの場所）が置かれて、盗賊が出ることは絶えてない（十里一亭。三十里一置。終無盜賊）」。

宮崎はこの一文は「羅馬帝国内の駅通制度」と解する。駅通制度は、アウグストゥスの時に整備されたものであるので、宮崎の解釈に従うならば、この一文は帝政期の制度を伝えていることになり、先のコンスル・ディクタルの制度との整合性が取れなくなる。

「その王の宮廷のある城は周囲が百余里に及び、官僚組織が置かれ公文書が扱われる。王は五つの宮殿を持って、それぞれの宮殿は十里の距離を隔てている（其王治浜側河海。以石為城郭）、其王所治城。周回百余里。有官曹文書。王有五宮。一宮間相去十里」。

宮崎は、この一文は「羅馬城の雄莊宏大なるを云う。五宮は羅馬七丘の故事を五行思想を以て裝飾せる結果」と解する。

「人々は中国とは異なった字の書き方ができる（其俗能胡書）」。

宮崎は「其の俗は能く胡書す」と読み下し、「ラテン作家の名声漢使の耳に入る」と解しており、現代語訳と異なる解釈をしている。

「その国内に源を発する河があり、国の西にはもう一つの大海がある（有河出其国、西又有大海）」。

宮崎は、この一文は原文の区切りを、「西」に置き、「有河出其国西、又有大海」とし、前半を「河ありて其国の西に出づ」と読み下し、「長さも幅も取り立てて云うに足らぬが、史上有名なるチベル河はこれ」と解する。

「大秦国の西には大海が広がり、大海の西には大河がある。その大河の西には南北に連なる大山があり、その西には赤水が流れ、赤水の西には白玉山があり、白玉山には西王母〔の山〕がある（大秦西有海水、海水西有河水、河水西南北行有大山、西有赤水、赤水西有白玉山、白玉山有西王母）」。

宮崎は、大秦の西の海水は、西部地中海、その西の河水はローヌ川、その西の大山はフランスの中央山塊、西の赤水はエプロ川、白玉山はスペインの銀鉱山を指すとした。

「民間では奇術や幻術が盛んに行われ、口から火を吐いたり、自ら縛った縄目を抜け出したり、十二のお手玉を巧みに弄んだりする（俗多奇幻。口中出火。自縛自解。跳十二丸。巧妙（非常）」。

宮崎は A.Rich の *A Dictionary of Roman and Greek Antiquities with Nearly 2000 Engravings on Wood from Ancient Originals Illustrative of the Industrial Arts and Social Life of the Greeks and Romans*, London, 1893 の Pilarius（曲芸師）の項をヒントに「十二丸を弄する芸人の俤

PILARIUS.

503

when baited ; or to infuriate them if they appeared tame and impassive ; a practice still continued at Mola, on the bay of Gaeta, upon a certain festival, at which it is customary for buffaloes to be baited in the main street. Mart. Spect. 19. Ascon. ad Cic. Fragm. pro C. Cornel.

PILARIUS. The original name by which the soldiers composing the third line or division of the old Roman legion were distinguished, because they alone at that time were armed with the heavy javelin or *pilum*, the other two using the spear or *hasta*. But when the *pilum* was adopted for all the three divisions, the title of *Triarii* was substituted for that of *Pilani*, with which it becomes thenceforth synonymous (Varro, *L. L.* v. 89. Paulus *ex Fest.* s. v. *Ov. Fast.* iii. 129.). Subsequently, however, to this period, and towards the close of the republic, when the custom obtained of drawing up an army by lines in cohorts, the distinctive character, as well as the name of *Pilani* or *Triarii* was abandoned, because it no longer represented any real distinction.

PILARIUS. One who exhibits feats of dexterity with a number of balls, similar to the Indian juggler (Quint. x. 7. 11. Inscript. ap. Fabrett. p. 250. n. 2.), by throwing them up with both hands, catching them on, and making them rebound from, the



inner joint of the elbow, leg, forehead,

Pilarius (曲芸師) の図

は、古羅馬の折絵 (diptyche) の中に覗うことが出来る。図は七丸しか飛ばして居らぬが、原理は同様にて、前額・手・腕・足の甲・ふくら脛にて丸を受けて跳ねかえして地に落とさしめずに操っている所である」とする。おそらく宮崎は偶然、この事典を繰っていて、この図を見つけたのであろう。ただし、このような曲芸が遠い外国に伝わるほどローマで盛んであったのかどうかは、分からなかった。

「金貨や銀貨を製造し、金貨一枚が銀錢十枚の値打ちを持つ(作金銀錢。金錢一当銀錢十)」。

宮崎は、この金銀比率は、ローマのみならず、西アジア一带において長く行われた比率であったとする。確かにローマでは、金貨と銀貨が用いられたが、金貨1枚に相当したのは銀貨25枚であったので、宮崎の理解とは合わない。

以上の宮崎の大秦関係の風俗の解釈は、そこに何らかの歴史的実事が含まれているということを前提にしている。宮崎の言葉を借りれば、『魏略』の記事は、「総じてその言う所、誤解もあり誇張もあるが、当時としては割合によく実相の把握に力めたりと云う可く、決して中国自身の幻影を遠西の地に蜃気楼の如く望見したものでないことが知れる」ということになるが、この宮崎の言葉は、白鳥への強烈な批判でもあった。

白鳥は、1931年に「大秦伝に現はれたる支那思想」において、大秦関係の記事、とりわけ、宮崎が分析したその制度や風俗を記した部分には、「漢人の思想から湧出した虚談が織り込まれている」と指摘していたのである²⁶⁾。白

鳥の考えによれば、そもそも漢人は西方に自国と勝るとも劣らない国があることを知ると、自尊心からその国を勝手に自分の分派とみなし、秦と呼び、さらにその秦は遙か西方にあることから中国人の神仙郷に近いものと考え、神仙は身の丈が長大であるから、その国を大秦と命名するようになっていた。したがって、大秦の「制度文物等を記述する際に、漢人の考

察に成れるものには自国で理想とするものを選び、彼の国の事物を陳べる時には、成るべく之を美化する傾向に赴くのは自然の勢²⁷⁾」であった。例えば、「其国無常主。国中有災異。輒更立賢人。以為王。而生放其故王。王亦不敢怨」は、漢人が「平生模範とする堯舜禹の禪讓政治を借りて、その制度を描き出したものであろう²⁸⁾」とする。言うまでもなく、堯舜禹は中国の伝説上の帝王で、それぞれ実子がいたにもかかわらず、堯は舜に、舜は禹に帝位を譲ったのである。また本文中に言及される災異は、彼らの時代に起こったとされる大洪水を意識しているのであろうとされる。同じく、「王出行。常使從人持一韋囊自隨。有白言者。受其辭投囊中。還宮乃省為決理」についても、堯舜禹が民意を探るために、様々な方法を用いたことが知られるが、これらの故事に基づいた創作であると考えるのである²⁹⁾。このような調子で、白鳥は、宮崎がその中にローマについての正確な情報を認めた部分をことごとく、「漢人の虚談」として退けていたのである。

白鳥の説を肯定する R・A・スタンは、より具体的に、大秦国のユートピア的な記述には 2 世紀の宗教運動である黄巾と五斗米の制度や思想が投影されていると指摘している³⁰⁾。一例を挙げれば、大秦には 36 の将軍が置かれたとされていたが、ここに黄巾の指導者張角が 36 の「方 (= 将軍)」を置いたことの反映を認めるのである。

おわりに

本稿では、主に宮崎の研究の中でもローマ帝国と関わる部分を見てきた。世界史上におけるローマ帝国の位置、すなわちローマ帝国をヨーロッパ世界の古代史の頂点と見、東アジアの秦漢帝国、西アジアのアケメネス朝ペルシアに相応するとの見方は、現在でも一定の説得力をもつものと評価できるように思われるが、一方で宮崎自身がかつとも自信を持っていた「条支と大秦と西海」は、問題を多く見出だすことになった。

その最大の要因は、宮崎が、漢籍に現れたローマが一体いつの時代のローマの情報であるのかという点について十分な配慮を払っていないことにあるように思われる。この問題は、大秦の風俗を解釈する際には大きく関わり、先に指摘したように、宮崎は、漢籍に共和政期のコンスルやディクタトルの制度を読み取りながら、同時にアウグストゥス以後の制度を見てとるような事態になっていたのである。おそらく宮崎に言わせれば、漢籍には 3 世紀以前の様々な情報が混ざり込んでいるのは明らかで、それを分別することは不可能であるし、それなりに西方の事情が中国に知られていたことを示せば十分と考えていたのかもしれないが、この情報源の軽視とも言える態度は、宮崎の論文の核心である地名比定の問題全体にも影響してくるように思われる。

地名比定の核になるのは、この点も先に言及したように条支の位置であるが、宮崎が条支の位置を考える際に最大の根拠としたのは、条支が中国から大秦に至る交通路上にあるということであった。当時の通説をなしていたヒルトや白鳥は条支をメソポタミア南部に比定し

ていたが、宮崎はメソポタミア南部は中国から大秦への交通の幹線上には当たらないとして、これを否定していたのであった。確かに、中国からの物資は、陸路安息に入れば、シリアに出て大秦に向かうのが普通であろう。「何を苦しんで数十日を費やして波斯湾頭に出て、更に困難なアラビア周航の道程を択ぼうか」という宮崎の批判はその通りである。しかし、条支の情報源が甘英であるとするならば—実際、甘英が条支に至ったことは疑いない—甘英は物資ではなく、したがって物資と同じルートを辿ったと考えるのは速断であろう。宮崎は、条支比定の4条件を挙げるが³¹⁾、問題の交易路以外の条件は、メソポタミア南部でも問題はなく、むしろメソポタミア南部ではないかと思われる節があり、条支の位置が変われば、当然のことながら、宮崎の地名比定全体が狂ってくることになる。

拙著『天を相手にする』においては、あたかも宮崎説が全面的に正しく、白鳥らの説が誤っているかのような書き方をしたが³²⁾、この場を与えられた機会に「条支と大秦と西海」を再検討した結果は、どうやら拙著の書き方を改めなければならないようである。

注

- 1) 194 頁。
- 2) 『宮崎市定全集 2 東洋史』、岩波書店、1992 年、264～297 頁。
- 3) 30～33 頁。
- 4) 37～40 頁。
- 5) 55～56 頁。
- 6) 梅棹忠夫『文明の生態史観』中公文庫、1998 年、122～123 頁。
- 7) 同上、107～108 頁。
- 8) 同上、124～125 頁。
- 9) 『宮崎市定全集 19 東西交渉』、岩波書店、1992 年、3～50 頁。
- 10) 宮崎市定『自跋集』岩波書店、1996 年、316～318 頁。
- 11) 『宮崎市定全集 2 東洋史』、140～142 頁。
- 12) 『宮崎市定全集 20 菩薩蛮記』、岩波書店、1992 年、323～355 頁。
- 13) 宮崎『自跋集』、346 頁。
- 14) F.Hirth, *China and the Roman Orient*, Shanghai and Hongkong, 1885. 白鳥庫吉「大秦国及び菰菰国に就きて」、「条支国考」、「大秦伝より見たる西域の地理」いずれも『白鳥庫吉全集』第7巻、岩波書店、1971年に所収。
- 15) 484～489 頁。
- 16) L・カッソン『古代の旅の物語』小林雅夫監訳、1998 年、146 頁。
- 17) 小川琢治『支那歴史地理研究』弘文堂書房、1928 年、400～401 頁。なお、小川は条支も安谷城も共にアンティオキアに比定する。
- 18) 森鹿三「漢唐一里の長さ」『東洋史研究』5(6)、1940 年、438～441 頁。
- 19) 相馬隆『流沙海西古文化論考』山川出版社、1977 年、269～271 頁。
- 20) 白鳥庫吉がそうであり、他にも小玉新次郎(『隊商都市パルミラの研究』同朋社出版、1994 年、317 頁)や相馬隆(同上、275～280 頁)がいる。
- 21) J.Ferguson, *China and Rome*, ANRW II.9.2, 1980, pp.581～603.
- 22) *The Roman Empire in Chinese Sources*, 1996, Bardi, p.49.
- 23) 小谷伸男「安息雀(ダチョウ)の原産地—『後漢書』西域伝、条支国補注—」『富山大学人文学部紀要』、31 号、1999 年、23～44 頁。
- 24) *The Roman Empire in Chinese Sources*, p.49.

- 25) J.E.Hill, *Through the Jade Gate: China and Rome*, vol.1., 2015, pp.269-270.
- 26) 白鳥「大秦伝に現はれたる支那思想」『白鳥庫吉全集』第7巻、237～301頁。引用は238頁。
- 27) 同上、265頁。
- 28) 同上、268頁。
- 29) 同上、268～270頁。
- 30) R・A・スタン（川勝義雄訳）「紀元2世紀の政治＝宗教的道教運動について」吉岡義豊、ミシェル・スワミエ 編『道教研究』第2冊、昭森社、1967年、13～30頁。
- 31) その4条件は、「安息の西にあり」、「安息より大秦に赴く交通路上にあり」、「西海に臨む」、「安息に役属する」である。
- 32) 184～186頁。